

特集・追悼 臼井勝美先生

臼井勝美先生の思い出

令和三（二〇二二）年九月二四日、臼井勝美先生が逝去されました。先生は昭和二三（一九四八）年の外務省勤務より『日本外交文書』の編纂事業に携わられ、大学に移られてから後も、外交史料館の開館に先立つ昭和四五（一九七〇）年から平成一六（二〇〇四）年まで、編纂委員を長く務められました。以下、臼井先生と深い交流を有した方々から寄せられた追悼文をご紹介します。

編纂者と研究者

『日本外交文書』編纂委員長 波多野 澄雄
一九九八年に上梓された『日中外交史研究―昭和前期―』の「序文」において、臼井先生はこう記されている。

「なぜ昭和戦前期の日中関係に強い関心をもつか、それはまぎれもなく同時代への愛着である。私事に即して言えば徴兵に応じた年に戦争に敗れたのであるが、一つの時代が終わったとの感慨は当時も今も同じである。」

日本と中国という二つの国の交錯した史的環境をいくらかでも解明することは、ともに生きた日本の若い世代のみならず、中国、朝鮮の同時代の人々への責務とも考えるようになったからである。」

この「序文」には、満洲事変、日中戦争、太平洋戦争と続く過程の解明こそが「同時代を生きた人々への責務」であるという、戦後世代

の我々とは異次元の強い覚悟が示されている。それは、「戦争体験者」として、「太平洋戦争を日本人の最後の戦争体験としたい」という揺るぎない思いとも重なっている。

自らに課せられたこうした「責務」を果たすために、先生は果敢に二つの道に挑戦された。一つは、日中関係史の研究者であり、もう一つは関係資料の編纂・刊行という編纂者の道である。そして、研究と編纂の成果は、何よりも「同時代を生きた人々」と広く共有しなければならなかった。そのため成果の刊行を同時に推進された。

研究者としての三〇年の間に、単行本として『日中外交史―北伐の時代―』、『満洲事変』、『満洲国と国際連盟』、『日中戦争』、『新版 日中戦争』、論文集として『中国をめぐる近代日本の外交』など数々の概説書や研究書を上梓された。他方、編纂者としては、全七冊の「満洲事変」を含む『日本外交文書』はもとより、すでに一九六〇年代から、満洲事変前後からの陸軍の未刊行資料を中心に、『現代史資料』（み

「ずず書房」として次々に編纂刊行された。研究者と編纂者という二つの道のうち、どちらに重きを置かれたかといえば、間違いなく編纂者であろう。『日本外交文書』や『現代史資料』の編纂の過程で得られた知見を、『満州事変』や『日中戦争』といった概説書に「解説のつもり」で展開された、と言つてよいであろう。したがって、概説書であっても、一つ一つの歴史的事実や解釈、事実の間の因果関係の記述に確かな裏付けがある。

例えば、二〇〇〇年に刊行の『新版 日中戦争』は、一九六七年の旧版の改訂や増補ではない。全く異なる戦争像が示されている。その間の三〇年に及ぶ資料探索の成果は、単なる旧版の改訂や増補を許さなかったであろう。

遺稿となった『日本外交文書』編纂の思い出(『外交史料館報』第三〇号)によれば、先生にとつて、「よい研究者とよい編纂者というのは全く異なるもの」であった。編纂と研究との違いや、両者の緊張関係に自覚的であつたからこそ、他の追隨を許さない珠玉の作品が生み出されたのであろう。

『中国をめぐる近代日本の外交』(一九八三年)には、「日中間には全面戦争勃発までの間に幾つかの岐路があり、そのいずれかを選ぶことによって戦争へ突入したと見たいのである」と記されているように、重要な岐路にあつて指導者の「選択」とその妥当性をきわめて重視された。同時に、末端の部隊の動静にまで気を配る、という姿勢は、先生の編纂と研究の双方の成果物に共通している。

さらに同書の「序」にあたる「太平洋戦争ノート」は、歴史家として心すべきことは、「どのような些細な事実をも全体につながるものとして見逃さないという緊張を持続することに尽きる」と結ばれている。編纂にも研究にも通ずる姿勢である。

白井先生の思い出

筑波大学名誉教授 三石 善吉

私にとって白井先生は、私の教育者・研究者としての道を切り拓いてくださっただけでなく、研究者・教育者としていかにあるべきかを身をもって範を示してくださいました。のみならず自由が丘の先生のご自宅で、今は亡き阿部斉先生を筆頭に松本礼二先生、久保文明先生、それぞれの家族ともども楽しい集いの時を何度も過ごさせていただきました。尤も奥様の辛辣な評語によれば「白井の許には赤鬼青鬼ばかり集まるのね」とのことですが、お酒の飲み方・楽しみ方までも教えて頂いた人生の導師でした。ここでは私にとって最も大切な白井先生との最初の邂逅、それは即ち私の運命が決まった大切な瞬間を綴らせてもらいます。

私が東京大学文学部(中国哲学科研究室)助手になったのが一九七二年四月です。当時なかなか就職先が見つからず、たちまち助手の任期三年が来てしまいました。指導教官の山井湧教授が教授会で私の任

期の一年延長を認めてくださって一安心すると同時に、あと一年、若し職が無ければ今非常勤で教えている高校で採用してくれないかな等と考えていました。

一九七五年の夏休みに入ってから直後、研究室に背が高く、厳めしく、それでいて何となく人を惹き付けてしまうような不思議な方が、「主任の先生にお会いしたい、私は臼井と申します」と突然の訪問を受けました。助手の私は全く何も知らず、助手室の隣の主任教授の部屋に「お客様です」と取り次ぎました。これが臼井先生との最初の出会いです。しばらくして山井教授が私を呼び臼井先生を紹介され、「臼井先生は筑波大学の方です。あなたを採用したいとのこと、宜しいですね」との話で吃驚しました。私の運命が決まった瞬間でした。

この時臼井先生は、竹内好先生が中心になって編集した朝日選書の『近代日本と中国(下)』(一九七四年八月刊)に載せたわたしの文章「後藤朝太郎と井上紅梅」、「山川均と藤枝丈夫」をご覧になっていて、「東洋政治思想」の講座にと直感され、私の採用に踏み切られたそうです。こうして私は一九七六年四月から、「西部開拓時代」を思わせる建設中の広大な工事現場(臼井先生の述懐です)の中に、ぼつねんと体芸棟・図書館のみが屹立する筑波大学に移りました。すっかり「僻地手当」が出ました。私の研究者・教育者としての道を切り拓いてくださった臼井先生のこの御恩は、決して忘れてはいけない最高の贈物でした。

臼井勝美先生との別れ

元外務省外交史料館副館長 原口 邦紘

二〇二一(令和三)年九月二四日(金)の早朝に臼井先生が亡くなられた、との電話を御令嬢から受け、覚悟はしていたものの、言葉もありませんでした。二七日、四人の曾孫さんご家族に見まもられ静かに旅立たれた棺には、一年前新装再版された『満州事変戦争と外交と』(講談社学術文庫)と『日中戦争 和平か戦線拡大か』(中公新書)が傍らに添えられていました。先生の日中外交史、近代日本外交史研究に寄与、貢献された業績は申すまでもなく偉大です。そして臼井先生は、なによりも『日本外交文書』編纂室出身の大先輩でした。一九四八年から二〇〇四年編纂委員を勇退されるまでの半世紀に及ぶ編纂員、大学転出後の編纂委員としての外交文書室・外交史料館における編纂事業への貢献は、測り知れません。

編纂委員を辞されて後は、二〇〇九年から久子夫人と御一緒にあざみ野のシニア・ホームで穏やかな日々を過ごされました。その間、一度だけ国立新美術館でのルノアール展鑑賞の途次、ご夫妻で外交史料館に立ち寄られ館員としばし歓談されました(二〇一〇年三月)。その後、あざみ野に何うたぎに聞かれたのが、外交史料館の皆さんの近況でした。遺稿となった『日本外交文書』編纂の思い出(『外交史料館報』第三〇号所収)の校訂に見えた熱田さんに、いつもは寡黙な先生が、流れる如く滔々と外交文書編纂の思い出、編纂の心得を話さ

れたのには驚きました。僅か二ページながら、臼井先生の編纂室への「遺訓」と言っても良いでしょう。先生は、終生、外交史料、外交文書編纂と共に歩まれ、外交史料館へ温かいまなざしを注がれ続けた、かけがえのない大先輩でありました。

臼井先生に初めてお会いしたのは、九州大学大学院在学中でした。一九七〇年九月、私を外交文書の編纂員として推薦いただき入省、外務省国際資料部調査課外交文書室に配属されました。当時、同室は長岡新治郎室長のもとに概ね中国関係(林正和、清水秀子)、欧米ソ・排日移民問題(吉村道男)、第一次世界大戦・国際連盟・国際会議(長岡、海野芳郎)の三班体制で、大正期の編纂が進行中でした。私は、北米移民問題・南米移民を担当することになり、吉村先輩のもとで、編纂の仕事をスタートしましたが、それまで近世史専攻でしたので、移民のイロハから学びました。臼井先生は、同年発足した『日本外交文書』編纂委員会の委員として、細谷千博委員長、小林龍夫委員とともに編纂事業の充実促進に努められました。自らも中国班の一員として林・清水さんとの共同作業に没頭していました。一九七三年に満州事変の編纂が始まる頃までには、『日中戦争』(前掲)、『日中外交史―北伐の時代―』、『日本と中国―大正時代―』、『満州事変』(前掲)と次々に上梓され、その迫力に圧倒されました。この頃、『図説日本の歴史16 大正新帝国の登場』(集英社)に参加させていただき、戦前の日本の海外移民の展開を広い視野で学習する機会を得ました。

私は編纂室十年目にカナダの日本大使館に在勤、編纂室に帰任後ほ

どなく、本省で戦後外交記録公開の業務に従事した後、また、一九九五年から三年間カナダエドモントン総領事館に在勤しました。その間、臼井先生からいただいた書簡の一つに「小生はなんとか、あと一冊と思い準備していますがなかなか進まず、挫折するかという予感もありますが、一応頑張ってみる積りです。一九三三―一九三七年で『日中戦争への道』と題は決まっています、今半分四分位のところで」と認められています。この計画は、大著『日中外交史研究―昭和前期―』(一九九八)として集大成されたと思われます。先生はご自分の業績に言及されることなど滅多にない謙虚なお人柄でしたが、同書に対する京都大学の三年後輩にあたる故江口圭一氏の書評(『日本史研究』⁴⁴⁵)をとっても喜んでおられました。同書評は、先ず『日本外交年表並主要文書(上・下)』(一九五五)が近代日本外交史研究に与えた影響を高く評価し、さらに全冊を通して適確かつ客観的な批評が加えられており、我が意を得たりと思われたのではないのでしょうか。

二〇〇四年三月、臼井先生が編纂委員を勇退された時に、偶然私も外務省外交史料館を定年退職し、細谷千博委員長(現・波多野澄雄委員長)の『日本外交文書』編纂委員の末席に加えてもらいました。臼井先生との公私にわたる思い出は尽きません。『満州事変』(全七冊)に心血を注がれた清水編纂員の逸話(臼井勝美他編『清水秀子さんを偲ぶ』一九八四)、外務省卓球大会を連続制覇した史料館卓球同好会、小旅行、数えきれない大小の宴席・飲み会等々、そこにはいつも、外交史料館の一員として臼井先生がおられました。生前の御厚情に深く

感謝し、心から御冥福をお祈り申し上げます。

臼井先生を追慕する

台湾国立政治大学教授 于 乃明

軍官のようで紳士で教養があり、いつも胸を張って歩いていらつしやる。これが私の臼井先生に対する第一印象である。しかし私たちと話す時、先生はいつも穏やかで親切な態度であつて、親しみを感じると同時に威厳があるというのが臼井先生であつたように思う。

私たちが文章を書く時、先生は字の正確さとか注釈を正しく追加する事を要求した。字と注釈を間違えると、「あなたがちゃんと学問をしていない人であると読者に感じさせる恐れがあるので注意しなければなりません」と言われた。クラスには台湾人とイギリス人のオックスフォード大学の卒業生がいて、先生はいつも留学生たちに文章を読ませて、私たちの発音、特に長音、短音、促音について注意深く修正された。先生は「あなたがたが帰国後にすべての単語を正しく読み、学生に教える必要があります」とおっしゃった。先生の細心のご指導に、今とても感謝している。

先生との接触が最も多かったのは毎週火曜日と金曜日の午後だった。先生はこの二日間外交史料館に通い、私は午後には臼井先生に会いにそこに行つてご指導を受けた。時々先生は私の資料のコピーまで親

切に手伝つてくださった。

私が特に感銘を受けたのは、南満州におけるアメリカ勢力の関与について先生と話合つた際、意見が一致しなかつた時である。日中関係の権威である先生に対し、私も強く主張することができなかった。それから私が東京から筑波の外国人客員教授の宿舎に戻つた時、先生はすぐに間違つていたとお詫びの電話を入れてくださった。先生の謙虚さは私に深い印象を残した。でも先生は冗談交じりに、それ以後間違えを恐れ講演の誘いを受け入れることはしなかつたとおっしゃられたので、私は少し罪悪感を覚えたものだった。

私が日本留学中、臼井先生は近現代日中関係研究会に私を紹介してくださいました。その繋がりの中で、私は藤井昇三先生、中村義先生、本庄比佐子先生がたの誠実な態度に接し、研究会が終わると必ず中華料理屋へ行つて、料理を食べ紹興酒を飲んでとても楽しい時間を過ごした。

臼井先生が私の論文を指導してくださる時、いつも私を先生のご自宅に呼び、先生の書斎で向かい合つて座り、先生は私と一ページ一ページずつ丁寧に読み込んで、私の論文の間違いや欠陥を注意深く指摘してくださいました。先生に叱られたという覚えはまったくない。毎回先生のお宅に伺うのに三、四時間以上かかったが、それも苦にはならなかつた。

私は臼井先生を何度も政治大学に客員教授として招聘しようとしたが、先生には応じて頂けなかつた。手紙には「招待されて本当に嬉し

かったが、体調が良くないので貴女の手を煩わせるのではないかと心配で断った」とあった。残念な事でした。

かつて先生から蒋介石の文集の購入を依頼されたことがあった。お応えすると感謝の気持ちを込めて二度もお礼の葉書を送ってくださいったこともあった。近代中国人のなかで、先生は蒋介石と張学良の二人を尊敬しているとおっしゃって、居間に張学良の字が飾ってあった。

先生が老人施設に入られてから、私は日本へ出張して時間があるときはよく三石善吉先生と一緒に onView 舞いにいった。先生のお気に入りのお台湾紹興酒、お茶とパイナップルケーキを必ず持参していった。先生に私が誰なのかと尋ねると、すぐに「ウさん」と答えて下さった。先生に最後にお会いしたのは二〇一九年二月だった。先生はすでに記憶が薄れたので何度も同じことを尋ねられたけれど、最後まで台湾の古い留学生である私のことを覚えていてくださってとても幸せでした。

臼井勝美先生を偲んで

啓明大学校教授 李 盛煥

臼井勝美先生の突然の訃報を受け、すぐは信じられずに茫然とすればかりだった。先生と初めてお会いしたのは、筑波大学社会科学研究所の博士課程二年（一九八六年）の時であった。元来私は、韓米の大

統領制の比較を勉強し、修士課程を終えた後はアメリカへ渡るつもりであった。しかし、家内が私と同じ大学の教育学研究科に在学していた等の事情もあり、日本で勉強を続けることにした。こうした状況の中で、それまでの指導教官が急に筑波大学をお辞めになり、私は一時的に臼井先生からご指導をいただくことになった。先生に巡り合ったのは偶然ともいえるものであった。

日本政治外交史に専攻が変わったことで、私は学問的に幼い子供のようになってしまったが、先生は、温かいながらも厳しいお言葉で常に励ましてくださった。日本外交史に関する基礎知識を殆ど待っていなかったため、戦前の日本外務省記録をテキストに行われていた先生のゼミは、私にとって、まさに「暗号解説」のようなものであった。しかし先生は、外務省外交史料館での資料の探し方から崩し書きの読み方まで丹念に指導してくださり、私は資料に徐々に馴れていった。一九八八年三月に定年退官された後も先生は、継続して私の博士論文の作成に格別の指導をしてくださった。時折、自宅に呼んでくださり、未熟で乱雑な原稿と一緒に読んで、修正すべき部分を指摘して下さったり、あらゆる点で教示してくださった。

人間的にも私は先生に様々な恩恵を頂いた。留学中、私が家族と住んでいた大学の学生寮を訪ねてみては、子供に小遣いをくださったたり、家内の勉強までも励ましてくださるなど、あらゆる面で面倒を見てくださった。一九八九年学位を取り韓国へ帰国した後も、先生はわざわざ家にまで訪問してくださり、勇気づけられたこともあった。私

はある時、大学を辞めて別の道を歩もうとしたことがあったが、その際、先生は家内に「それは李さんの道ではなさそうなのだが」という心配の言葉をかけてくださったりもした。先生の言葉通り、私は元の場に戻り、現在に至っている。

先生から学び得たものは、数えきれないほどである。研究者としての情熱、そして、教育者としての学生に対する理解と人間味溢れる熱い愛情こそが、私が最も感銘を受けたものである。今後、このような恩恵と愛情のこもった先生のご指導を仰げなくなってしまう、残念でならない。

先生に最後にお目にかかったのは、横浜の「青葉の丘」であった。その時先生は、奥様とともに「韓国に行きたい、行けるかな」と何回も仰っていた。先生は旅行ができる健康状態ではなかったので、韓国旅行は実現できず、至極残念である。

私が今日という日を大切に歩んでいるのも、全て臼井先生のご指導のおかげであり、心より感謝の気持ちをお伝えしたい。安らかに眠りにつかれる事をお祈り申し上げ、ここに哀悼の意を表する次第である。

臼井先生を悼む

防衛省防衛研究所研究幹事 庄司 潤一郎

小生が先生に初めてお目にかかったのは、昭和五三年筑波大学一年の時、「政治外交史」の授業を聴講した時であった。一瞬にして先生に魅了され、二年に進級する際は、人文学類から先生の所属しておられた社会学類に転類した。その後大学院に進学し、御指導を受け続け、昭和六一年先生の推薦により、防衛研究所戦史部（現在の戦史研究センター）に入り、現在にいたっている。これまでの六三年に及ぶ人生の三分の二以上にわたり、公私にわたってお世話になってきた。

先生の変わることのない研究の原点は、研究者である前に一つの時代を生きる者としての責任に思いをはせることであり、「大東亜戦争を日本人の最後の戦争体験としたい」という強い思いであった。ややもすると、戦後日本においてこうした意識によって歴史研究が流される傾向は否定できないが、先生は一次史料に基づき、禁欲に貫かれた姿勢を常に保持されていた。

先生は、「戦争を裁くことではなく、戦争にいたる経過をきわめて克明に記録し、どのような子細な事実をも全体につながるものとして見逃さないという緊張を持続することに尽きる」（『中国をめぐる近代日本の外交』）と述べておられた。このような作業がいかに困難であるかと先生御自身も述懐されておられるが、それは、戦後日本に散見される「安易な」研究への警鐘でもあろう。

先生の主要な研究対象は、ついには干戈を交えることになった近代の日中関係史であった。なかでも、一九六七年に刊行された『日中戦争』（中公新書）は、特に当時大東亜戦争の陰に隠れていた中国大陸での戦いの全体像を概観した点で、画期的であった。

二〇〇〇年には、同書を書き改めた『新版 日中戦争』（中公新書）を刊行された。その後、「蒋介石日記」の発見、大東亜戦争下の日中戦争の実像の解明など、近年日中戦争に関する研究の進展は著しいものがあるが、先生の新書の内容は色あせることなく、その意義は失われていない。

小生の研究テーマである近衛文麿についても、先生の近衛評価は厳しいものであった。近衛は、満州事変以降の流れを、「我日本として迎へべき必然の運命である」と指摘していたが、先生は、日中戦争直前に外相を務めた佐藤尚武を証左として、近衛と比較することにより、「必然の運命」ではなく別の選択肢があったのではないかと述べられている（「一つの選択―近衛文麿と佐藤尚武―」『日中外交史研究―昭和前期―』）。

同様な視点から、一時普及した「一五年戦争」論―現在では、「アジア（・）太平洋戦争」に受け継がれている―に見られる満州事変から日中戦争への連続性の議論に対しても、「満州国の成立以後も、日中間には全面戦争勃発までの間に幾つかの岐路があり、そのいずれかを選ぶことによって戦争へ突入したと見たい」と疑問を呈されていた（『中国をめぐる近代日本の外交』）。

先生は、若い世代による柔軟かつ新鮮な研究姿勢は大切であり、それを貫けるかは本人の精進次第であると常々言われていた。生前、先生の期待にほとんど応えることができなかったことが、大きな心残りである。心より、先生の御冥福をお祈り申し上げる次第である。

『日本外交文書』と臼井勝美先生

外務省外交史料館 富塚 一彦

『日本外交文書』の編纂担当官として、一九九一年から外交史料館に勤務し、臼井先生のご指導を仰ぐ機会を得た。編纂委員だった先生は、火曜と金曜に来館される。对中国関係の担当である私は、関係ファイルや採録候補文書を揃えて、先生のご意見を伺うのだが、まさに真剣勝負の時間だった。日中関係史研究の泰斗に対して、こちらは三十前半の若輩だが、外交史料を挟んで向かい合ったときだけは、上下関係を気にせず思ったことをはっきり言う。同じ仕事仲間、そんな雰囲気だった。採録候補文書の原稿のいくつかに鉛筆でバツがついて戻ってくるのだが、これは採録不要という意味だった。

先生もまだ気づかない文書を見つけて褒めていたみたいと、必死でファイルを読んだ。満州国帝政実施の際の交換公文に付属書簡が存在することをお伝えしたときには、あたかも宝物が見つかったかのように喜ばれたのを覚えている。作業を重ねるうちに、史料の解釈にも

議論が及んだが、そのときは得意になって自説を述べても、あとでご著書を隅々まで読み返してみると、そのニュアンスがすでに書かれていることに気づく。お釈迦様の掌の上をぐるぐる回っているような気分をよく味わった。

先生は常に『日本外交文書』の将来を案じておられた。これは細谷千博先生から直接伺った話だが、臼井先生はこの件でたびたび細谷先生へ電話をされたという。また、先生は私の仕事ぶりを時々長岡新治郎先生と比較された。バランスのとれた編纂で知られる大先輩に比肩するはずはないのだが、これは先輩たちの積み上げてきた良き伝統を引き継いで、将来の編纂を担ってほしいという先生のお気持ちの表れだと受け止めた。一層真摯に取り組まねばと史料に向かった。

先生は二〇〇四年に編纂委員を退かれたが、日中戦争の特集を早く出したいというご希望に添えなかったことは、私にとつても心残りだった。特集「日中戦争」が刊行されたのは、東日本大震災のすぐあとのことで、早速、先生にお届けに上がった。ホットケーキが好きなことは知っていたが、手土産には向かないので、それに近い菓子を持って、お住まいの施設を訪ねた。先生は全四冊の新刊を手許に並べられて、菓子を頬張りながら、満足そうなお様子だった。「パパ、うれしそうね」とお嬢さんが声をかけられると、「当たり前じゃないか。これを作るために、ずっとやってきたのだから」とおっしゃった。そのときのお顔が今も忘れられない。